

はじめに

本書は、『週刊ダイヤモンド』に隔週連載中のエッセイ『超』整理日記の二〇〇〇年度分(二〇〇〇年四月から二〇〇一年三月まで)をまとめたものである。この連載の単行本は、これで六冊目になった。なお、今回は、二〇〇一年三月に行なった東京大学の最終講義も収録した。

単行本化に際して、雑誌掲載文を大幅に改訂している。今回は、改定分を「その後の展開」「Glossary」「Whos Who」「詳しく知るには」「ばっくぐらんど」というかたちで示した。これまでも単行本化に際して改訂を加えてきたのだが、本文に埋め込んだり注のかたちにしていたので、はっきりわからなかったかもしれない。今回のスタイルで、改定分も独自の内容を含んでいることを明示できたと思う。「その後の展開」では、まず、雑誌掲載エッセイに対する反響を書いている。エッセイに関しては、多くの反響がある。とくに、私のホームページにメールのかたちで寄せられるものが多い。このなかには非常に有益なものがあり、何らかのかたちで公開させていただきたいと考えていた。また、本文に書いた内容が時事的なものである場合、「その後どうなったか」を記録してある。例えば、4「宇宙開発で日本企業を再生」で「宇宙観光などできない」と書いたのだが、掲載のほぼ一年後にそれが実現したので、その経緯を簡単に記した。さらに、私自身の個人的な後日談もある(例えば、1の『ねずみ捕り』に関する「考察」)。「Glossary」はテクニカルチームなどの解説、「Whos Who」は人名の解説である。「詳しく知るには」には、参考文献や関連するインターネットのウェブサイトを示した。

時事的な事項の背景は、掲載時には周知のことであっても、時がたつと記憶が薄れる場合もある。これを解説したのが、「ばっくぐらんど」だ。

以上のレイアウト変更に伴って、これまでは本文の下欄に示した「記録帳」と「はやりことばの盛衰」を、巻末にまとめた。

本書に収録されたエッセイを、掲載時順ではなく、内容別に並べなおすと、つぎのようになる。

日本は再生できるか

- 4 宇宙開発で日本企業を再生
 - 6 税制改革で日本を変える
 - 14 IT革命で日本を活性化！
 - 18 蚊帳の外の日本人
 - 21 「日本の時代」の終焉
 - 25 ここに陸終わり、海始まる
- (最終講義) 日本は二二世紀に生き残れるか
- 政府と政策の原理原則
- 1 「ねずみ捕り」に関する一考察
 - 16 原則なき国家 日本
 - 17 「ゆとり教育」が奪う教育を受ける権利
 - 24 原則こそ重要だ

ITがもたらす変化

- 2 世界一価値が高い企業
- 5 ITが変える労働市場
- 7 少し変だぞ、日本のIT
- 13 五輪、テレビ、そしてインターネット
- 15 ネットで得られない情報
- 22 プレゼンテーションの技術

新しい世紀を迎える

- 19 二一世紀の現実的なユートピア
- 20 新ミレニアムへの夢

経済学と経済学者

- 3 数学は経済学を変えたか
- 8 経済学者とは何者？

「国際化」を考える

- 9 姓・名の順の「国際化」
- 11 Who are you?と聞かれて何と答えるか
- 23 漢江はいまでも凍りますか

季節雑感

- 10 暑さへの最高の対処法
- 12 秋のはじまり

このように並べてみると、政策の基本的な考えに対する憤りが多いことに、われながら驚く。状況判断の誤りは、いかにしても免れえないことがあり、それを事後的に批判するのは酷な場合もある。しかし、基本的な原理原則における誤りは、許しがたい。最近の政策を見ると、状況判断の誤りよりも、原則論レベルでの誤りが目に付く。日本の将来に対する危惧は、増すばかりだ。

一桁の支持率で低空飛行を続けた森内閣は退陣した。二〇〇一年度の初めに登場した小泉内閣は、逆に驚くべき支持を受けている。しかし、株価に見られるマーケットの判断は、この内閣の「構造改革」が空虚なものでしかなく、見破り、見限っているようである。われわれの住む国がこれからのような経路をたどることになるのか、現在ではだれにもわからない。

『週刊ダイヤモンド』の連載に関しては、同誌編集部稲田敏貴氏にたいへんお世話になっている。また、単行本化に際しては、これまで同様、ダイヤモンド社出版事業局の佐藤和子氏にお世話になった。同氏には、巻末の「記録帳」および「はやりことばの盛衰」の作業に関してご苦労いただいた。両氏に厚く御礼申上げたい。

なお、東京大学最終講義の掲載に関しては、東洋経済新報社の村瀬裕巳氏が作ってくださった記録をもととした。本書への掲載を快く承諾していただいた東洋経済新報社と村瀬氏に御礼申上げたい。

二〇〇一年八月

野口悠紀雄